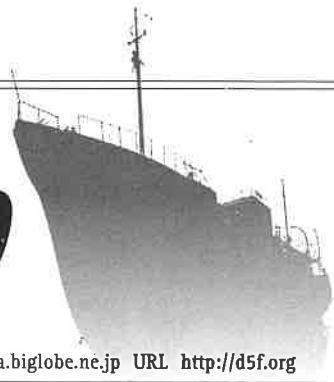


2004.11.01
No.314

福竜丸だより

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



世界最初の核爆発地グランド・ゼロ1945.7.16記念碑 豊崎博光撮影



被災五〇周年記念特別企画

豊崎博光写真展

ビキニ水爆五〇年・地球被曝六〇年

核が作り出した光景

11月20日～05年1月23日

ビキニ被災五〇周年記念

事業の特別展の最後となる

「豊崎博光写真展 ビキニ水

爆五〇年・地球被曝六〇年」

は、十一月二〇日より来年一

月二三日まで開かれます。

豊崎さんは、七〇年代後半

からマーシャル諸島の核被

害者をはじめ世界各地の核実

験被害地、ウラン採掘の先住

民や核製造工場の被曝者を訪

ね、被害の実情を撮影取材し

告発してきました。また、重

大な事故となったスリーマイ

ル島原発やチェルノブイリ原

発の現地を訪ね、核汚染の状

況を調査取材してきました。

今回の写真展は、三〇年ち

かい取材のなから、豊崎さ

んが見た「核の作り出した光

景」を展示します。写真展初

日の十一月二〇日午後三時よ

り豊崎さんによるオープニン

グ記念のトークがおこなわれ

ます。皆さんのご来館をお誘

いするものです。

*

平和協会は、記念事業の一

環として「第五福竜丸展」の

巡回展示をおこなっています

が、八月の高知、伊丹、岸和田、

鹿児島につづいて一〇月二八

日より十一月二三日まで京

都・立命館大学国際平和ミュ

ージアムで、「ビキニ水爆被

災五〇年展」を開催します(主

催・同大国際平和ミュージア

ム、第五福竜丸平和協会)。

オープニング・トーク 豊崎博光写真展

◇ 11月20日(土)

15:00～16:00

◇ 第五福竜丸展示館

ご参加をお待ちします

ビキニ水爆被災五〇年・地球被曝六〇年―核が作り出した光景―に寄せて

豊崎博光



旧ソ連セミパラチンスク核実験場の風下地域、カラウル山での核実験禁止集会のカザフの参加者（1990・5撮影）

アメリカが一九四五年七月に世界初の原爆実験を行い、同年の八月に広島と長崎に原爆を投下してから今日まで、地球上では、アメリカ、旧ソ連（ロシア）、イギリス、フランス、中国、インドとパキ

スタンによって二〇五七回以上の核実験が行われました。

そしていま、世界には二八〇〇発以上の核兵器があり

ます。大量に積みあげられた核兵器が使われた場合の危険

性について一九五五年七月の

ラッセル・アインシュタイン

宣言は、「もし多数の水爆が

使われたとしたら、……瞬間

的に死ぬものはわずかだが、

多数のものがじりじりと病氣

の苦しみをなめて肉体を崩壊

してゆくでしょう」と警告し

ました。

その一方で、人類は、この

六〇年間に行われた核実験で

生みだされ放出された放射能

によって肉体の崩壊へゆるや

かな死Vの危機にさらされて

います。

放射能は核実験で生みださ

れるだけではありません。核

兵器製造と原子力発電の核燃

料製造のもとであるウラン鉱

石の採掘場から、また、スリ

ーマイル島やチェルノブイリ

原発事故などで放出された放

射能によっても肉体は崩壊さ

せられます。

放射能汚染地帯を歩く

私は一九七八年から二五年

以上にわたって、放射能と放

射線の被害を知るために世界

各地の核実験場、ウラン鉱山、

事故をおこした原発とその周

辺地域を歩きました。放射能

にむしばまれる多くの人びと

にも出会いました。

核実験場やウラン鉱山、事

故をおこした原発とそれらの

周辺地域では足もとにある放

射能や放射線が見えませんが

した。

それらの地域にはいつもと

同じ光景が広がり、人びとが

暮らしていました。放射能は

見えず、味も臭いもしません。

放射線もまた感ずることがで

きません。それゆえ、人間や

動物、植物は知らず知らずの

うちに放射能と放射線にむし

ばまれるのです。

放射能にむしばまれている

人の多くはガンにかかっている

のですが、その被害は外見

からはみえませんでした。

故ジョン・アンジャイン

さんの教え

二〇〇四年七月二〇日、ア

メリカが五〇年前の一九五四

年三月一日に行った水爆実験

の灰の灰をあびせられたマー

シャル諸島ロングラップ環礁

の元村長ジョン・アンジャイ

ンさんが亡くなりました。

肺からの出血が死因とされて

いますが、ガンが全身に広が

つていたともいわれています。

八一歳でした。

ジョンさんは体験させられ

た水爆実験の被害を伝え、核

兵器が使われた時の危険性を

日本と世界に訴えつづけてき

ました。

私は二〇年以上にわたる取

材と文通を通じて、ジョンさ

んから、水爆の灰が人び

との健康だけでなく、暮らし

や社会、文化や伝統までも破

壊したことを教えられました。

その結果、放射能と放射線の

被害が想像以上に深刻で、広

範囲であることを知りました。

* 今回展示する写真は、この

六〇年間に世界各地で行われ

た核実験、ウラン採掘、原発

事故で作られた光景の一

部です。

撮影したその場所には放射

能が残り、放射線があります。

人びとが暮らし、文化や伝統

を育んだところであり、いま

それらがむしばまれていると

ころなのです。これらのこと

を今回展示した写真から読み

とっていただければ幸いです。

（とよさき ひろみつ／フォ

ト・ジャーナリスト）

核の脅威、告発しつづけた ラルフ・ラップ博士逝く

中川 正美

福竜丸事件を世界に
知らせる

米国の核物理学者で、著書『福竜丸』でビキニ事件の恐ろしさを世界に知らせたラルフ・ラップ博士が九月七日、米・バージニア州の病院で肺不全のため亡くなった。八七歳だった。

今年初め同僚がバージニア州アレクサンドリアの自宅にラップ博士を訪ねた。六年ほど前からパーキンソン病を患い、言葉が少し不自由だという。ジャネット夫人の「通訳」で何とか会話できる状態だったが、記憶ははっきりしていた。

「小さな漁船だったから第五福竜丸は助かった。もし輪送船ほどの大きさだったら、水爆実験による放射性降下物が甲板に大量に堆積し、乗組員は全員死亡しただろう」家族に繰り返し、そう語っていた。

無警告原爆投下に反対

核とともに歩んだ生涯だった。ニューヨーク州に生まれ、シカゴ大学で物理学を専攻。第二次大戦中に原爆開発のマンハッタン計画に加わり、冶金研究所副所長を務めた。だ

が、日本に対し、無警告で原爆を使用することには反対だった。同じ趣旨で一九四五年七月十七日に物理学者のシラードらが起草した米大統領あての請願書にも署名した。

戦後、陸軍参謀本部の科学顧問になり、米国が四六年からマーシャル諸島・ビキニ環礁で始めた核実験（クロスロード作戦）にも参加した。その後、国防総省の核研究・開発局長などを務めたが、四九年に政府機関を辞し、「放射能の怖さを訴えたい」と著述家への道を選んだ。

「福竜丸」を執筆

『福竜丸』が出版されたのは、事件から四年たった五年である。その前年、博士は夫人とともに来日し、三週間ほどかけて第五福竜丸の乗組員らの証言を集めた。

その調査を手伝った日本人がいた。当時、朝日新聞外報部員で、翻訳も担当した八木勇さんである。初めは社命だったが、退社後も親交を温め、「核戦争になれば」「兵器文化」など博士の多数の著書の翻訳を手がけた。

八木さんは二〇〇〇年春に八一歳で亡くなったが、遺族が保管している資料の中には、第五福竜丸が被災した当時の船内の人員配置を記したメモや、乗組員のあだ名から生活状況まで克明にまとめた取材ノート、筒井久吉船長がつけていた航海日誌の写しもある。

乗組員の一人だった大石又七さん（七〇）は「東京都大田区」が『福竜丸』を読んだのは、一五年ほど前だという。

「乗組員の記憶も確かな時の記録で、当時の状況をよく描いている。事件のことは家族だけに伝えようと少しづつ書き留めていたが、それを出版するきっかけの一つがラップ博士の著書でした」。

事件は今も未解決

ビキニ事件は翌年の一九五五年一月、水産業界や乗組員らへの慰謝金二百万ドルを米国が支払うことで政治決着した。それから半世紀。事件の記憶は薄れ、歴史のなかに埋もれようとしている。だが、第五福竜丸の乗組員やマーシャル諸島の被災者、

核実験に参加した米兵らはいまも放射能がもたらした病におびえ、苦しんでいる。

マーシャル島民らの被災は、実験当時の風向きが予想外に変ったことによる偶然の出来事だったのか。事件が政治決着した背景には何があったのか。

死の灰を浴びて亡くなった久保山愛吉・無線長の死因について、米国は「原爆症ではなく、輸血による肝炎」という見方を変えてはいない。

ラップ博士が迫ろうとしたビキニ事件の真相は、いまなお解き明かされていない。（なかがわ まさみ／朝日新聞記者）



ラルフ・ラップ夫妻
(写真・高橋博子氏提供)

写真でたどる第五福竜丸

ビキニ水爆被災50年記念出版展示館の収蔵資料の写真で第五福竜丸事件をたどる。

学校・公共図書館などにリクエストをお願いします。

◆問い合わせ 電話 03-3521-8494

I N F O R M A T I O N

「手紙—託された心」 特別展開かる

久保山愛吉さんの50年目の命日にあたる9月23日から4週間にわたり、久保山愛吉さんと家族に寄せられた手紙が特別展示されました。平和協会が収蔵する約100通の手紙のほか、焼津市歴史民俗博物館のご厚意で、愛吉さんから家族への手紙の写真も展示され、生前の愛吉さんと焼津の家族を結んだラジオ放送も流されました。

北海道新聞、琉球新報により差出人やその家族と連絡がとれるなど、多数のメディアの協力がありました。10月10日には、座談会「手紙の書



かれた時代を語る」が催され、13名が参加、当時の暮らし、学生生活、教育界や原爆被爆者、結核療養所のようなすが語られ、「時代」を知る手がかりを得ることができました。(写真は「手紙の読み語り」より)

<感想ノートから>

子どもからの手紙を読みました。学校で書かせたところもあるようで、

録するか、ということでした。林さんは、事件関係者および当時公開された関係書誌に当たるなどして、事件後の推移を追跡し直すことから始めます。国会図書館、水産庁資料館、国立公文書館、関係官庁、新聞社、また大宅文庫など、1年有余も足を運びます。林さんの調査で焼津市関係資料が、市役所の倉庫から再発見されたりもします。

資料収集が報道されたため、「関係当局から“国のしたことをあばきたてるようなことに協力できない”と拒否され、政府関係の資料収集が厚い壁にぶつかり」「日米両政府の圧力があつたであろうことを随所で感じさせられながら」の調査・収集でした。

「ビキニ事件には、いまなお“ナゾ”につつまれている部分が数多く残されている」「関係資料の収集が今後も根強くつづけられることの必要性をあらためて感ずる」、林さんの文章の結びはこう記されています。

「資料集」刊行から28年。その間も今日も、林さんが精魂をそそがれた「資料集」は、ビキニ被災事件を知るうえでの基本資料です。

心からご冥福をお祈りします。

(第五福竜丸平和協会理事)

林 茂夫さんを悼む

山村茂雄

軍事評論家の林茂夫さんが、さる7月18日に亡くなりました。75歳でした。林さんは、日本平和委員会の役員として「平和新聞」の編集長などを歴任、自衛隊、軍事問題の評論・著作の活動を続けられました。当協会にも長くご協力をいただきました。

私個人としては、幾つものことを教えられました。大きな体に似ず細かい字で書き込みをする姿が浮かびます。

*

第五福竜丸平和協会編『ビキニ水爆被災資料集』が出版されたのは1976年3月。「資料集」は、ビキニ被災20周年記念事業として準備され、多くの方のご協力がありました。編集委員会は74年に発足しますが、編集の実務は、すべて林さんに負うこととなります。

「資料集」巻末に載る林さんの「資料収集にあたって」の文章には、収集にあたっての困難や“壁”のことが印象深く記されています。

まず直面したのは、ビキニ事件の関係資料はどの範囲までを収集し収

私も教師としてやらなくてはならないことがたくさんあると思いました。

(20代女性)

たくさんの手紙を見て、この時期全国の人が第五福竜丸の被災に強い関心を持っていたことに今さらながら驚きました。子どもたちからの手紙は心がこもっており、学校の先生方のご努力もなみなみならぬものであったと感じました。(60代女性)

全国の方々が久保山さんの病状に一喜一憂していたことがわかり、当時の日本人はやさしい気持ちの人が多かったと思います。当時私は小学2年生でしたが手紙を出さなかった(学校で動きがなかった)ことを残念に思います。

(50代女性)

久保山さんが亡くなった時、日本中からはげましの手紙がきたことに大変感動しました。私より5歳以上も年下の小学校1年生の子でもとても心配してました。日本中のすべての人が悲しんだんだろうなと思った。

(10代女性)

久保山さんの命日に さまざまな催し



秋のお彼岸にあたる久保山さんの命日9月23日に、さまざまな行事がおこなわれました。

12回目を迎えた「平和を語る集い」ではビキニ事件50年によせた語りや朗読劇も多く、第五福竜丸ボランティアの会のメンバーによる「久保山さんへの手紙」の読み語りも披露されました。

新日本婦人の会東京都本部による「愛吉・すずのバラ」の記念植樹、東京原水協の学習会、マグロ塚を作る会のつどい、久保山忌句会も行われました。(写真は記念植樹)。